



TITLE:

長野縣伊那谷北部の竹藪に就て

AUTHOR(S):

小松, 三郎

CITATION:

小松, 三郎. 長野縣伊那谷北部の竹藪に就て. 地球 1934, 22(1): 56-69

ISSUE DATE:

1934-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184312>

RIGHT:

長野縣伊那谷北部の竹藪に就て

小松 三郎

目次

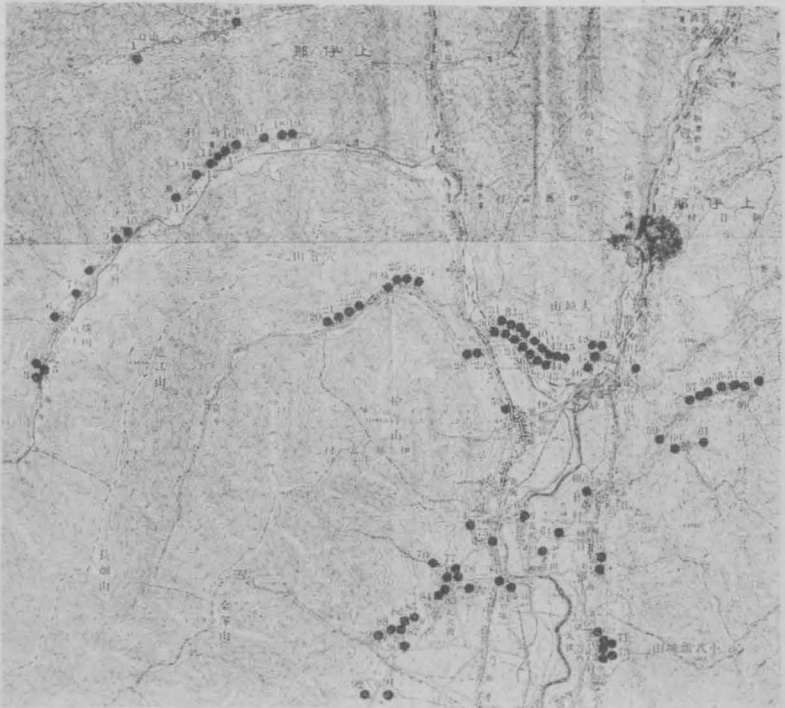
- 一、序言
- 二、地域及び調査方法
- 三、分布狀態
- 四、林相
- 五、栽培及び利用狀況

一 序言

伊那谷の淋しい冬枯の聚落に、平和な色彩と風情を添へてゐるものゝ一つは、彼の點在する竹藪であらう。竹族はアジアのモンスーン地方が最もその種類に富み、アジアには百六十種からあり、日本だけでも三十七種程あるといふ。伊那谷で最も有用であり且つ栽培するものは苦竹、淡竹、孟宗竹であるが、特に南部下伊那では美林がありその栽培にも留意されてゐる。伊

那谷の北部即ち所謂伊北地方は此の谷に於ける竹藪の北部限界であつて、其の面積も至つて僅かではあるが、屋敷林としても相當重要な役割を持つてゐる事は分布の上からも考へられる。而して北部に於ける竹藪の大部分は苦竹であり、淡竹は稀で孟宗竹は殆んど無い。近年産業經濟の變遷に伴ひ竹藪も漸く荒廢せんとするに至つたが、又最近その經營に意を注がんとする者も見えるやうになつた。筆者は昭和七年冬より八年春にかけて此の地方の竹藪に就て少しく觀察したから、此所にその地理的考察の一端を記載し諸賢の御教を仰ぎたいと思ふ。本稿を起すにあたり助言を蒙つた下川頼人氏並びに調査上の援助を得た小澤彦九郎氏に對し感謝の意

第一圖



を表する。

註 (一) 日本百科大辭典

二 地域及び調査方法

調査した地域は所謂伊北地方であつて、伊那谷の最北部を占め小野盆地・川島溪谷・天龍川諏訪口をも含んでゐる。第一圖は竹藪の位置を成る可く正確に五萬分の一地形圖上に記入し、其の數字は本文の記事と照合するに便したものである。南部の限界は全く調査上の便宜のためであつて何等の理由はない。即ち小野・川島・伊那富・朝日の四ヶ村を主とし東箕輪及び中箕輪の一部に及んでゐる。

調査方法は豫め次の如き調査要項を定め、是を表記せる調査カードを作り、それによつて野外調査を遂げた。

長野縣伊那谷北部の竹藪に就て

(一)位置

(二)地形

(三)土質

(四)立地面積

(五)密度

(六)竹幹長さ

(七)竹幹太さ

(八)初年生本數

(九)栽培の仕方

(十)利用方面

庭園に植ゑて鑑賞用とする程度の極小面積のものは除き、他は殆んど全部調査したが、本文に於ては立地面積一アール以上のものに就いて考察することにした。竹藪の接續地帯にあつたものは同一單位として取扱つた。それは單に所有者が異り僅かの境界があるのみで他の條件は殆んど相似たものであつたからである。地形は大體の觀察に基づいて分類をなし、傾斜と方向はクリノメターを使用した。土質は村の土性調査書を參考とし野外調査によつて更に補つた。立地面積は田畑等の如き判然たる境界あるものは至つて少く、大抵周圍は雜木と混濬して不明瞭であつた。従つて面積の實測も困難であつたから、所有者或は附近の人にその反別を訊

き或は目測によつて大略を計算した。(五)・(六)・(七)・(八)の四項は各單位地域の林相を見て略略その中等の地區を選び、方二メートル中に含まれるものにつき觀察した。密度はその個體數を數へ、長さはハンドレヴエル或は目測にて、太さは卷尺にて地上一メートルの邊を各個體につき測り後平均値を計算した。初年生の竹幹は一見して識別し得る故その個體數を數へた。栽培の仕方は各地方の百姓に訪ね、利用方面は土地の人或は桶職人について聞合せた。植付年代は觀察上重要な點であつたが、最近栽植せるものゝ外は相當古くその年代も不明のものが多かつたので此所には記載し得なかつた。その結果は第一表の如くであつて、嚴密な成績は得られなかつたが大體の狀況は知る事が出来るかと思はる。

註 (二)伊那富村土性調査概要 伊那富村農會昭和四年

第一表 竹 藪 調 査 表

件號	位 置	面積 (a)	地形	傾斜 方向	傾度	土質	密度	初年生 本數	長さ (m)	太さ (cm)	調査 年月日
1	小野村 山口	1	段丘崖	65°E	30°	砂礫、壤	15	6	6	8	7,11,13
2	" 中村	1	段丘崖	90°W	50°	砂礫、壤	8	3	6	7	"
3	川島村 源上	2	山麓崖	30°E	45°	礫、壤	12	4	5	9	8,3,21
4	" "	5	山 麓	30°E	35°	礫、壤	18	5	4	12	"
5	" "	1	河岸崖	40°E	45°	礫、壤	20	6	5	10	"
6	" "	1	山 麓	40°E	40°	礫、壤	15	5	6	12	"
7	" "	1	段丘崖麓	40°E	30°	礫、壤	14	5	6	12	"
8	" "	2	山 麓	40°E	35°	礫、壤	18	6	5	12	"
9	" 門前	6	山 麓	60°E	30°	礫、壤	15	6	4	10	"
10	" "	2	山 麓	60°E	30°	礫、壤	15	6	4	10	"
11	" 一ノ瀬	3	山 麓	50°E	30°	砂、壤	14	5	5	12	"
12	" "	5	山 麓	40°E	20°	礫、壤	12	3	4	12	"
13	" 飯沼澤	2	山 麓	40°E	25°	礫、壤	12	3	6	12	"
14	" "	3	山 麓	60°E	30°	礫、壤	12	3	7	13	"
15	" "	2	山 麓	60°E	30°	礫、壤	12	3	7	13	"
16	" "	2	山 麓	60°E	30°	礫、壤	14	4	5	13	"
17	" 下飯沼澤	6	山 麓	80°E	25°	礫、壤	24	6	7	13	"
18	" "	1	崖 錐	60°E	20°	礫、壤	18	5	7	14	"
19	" "	1	扇狀地	60°E	20°	礫、壤	18	5	7	14	"
20	伊那富村小横川	50	山 麓	50°E	38°	礫、壤	10	4	10	18	7,11,23
21	" "	5	山 麓	60°E	40°	礫、壤	8	3	10	16	"
22	" "	20	山 麓	30°E	40°	礫、壤	9	4	10	18	"
23	" "	5	山 麓	60°E	38°	礫、壤	8	3	6	14	"
24	" "	3	段丘崖	80°W	50°	礫、壤	15	5	6	13	"
25	" "	5	山麓窪	20°W	36°	礫、壤	10	4	6	13	"
26	" "	10	山麓窪	20°W	35°	礫、壤	14	5	7	12	"
27	" "	100	山 麓	50°W	35°	砂礫、壤	15	6	11	21	"
28	" 宮所	5	段丘崖	60°W	40°	礫、壤	10	6	6	14	"
29	" "	5	山 麓	80°E	35°	礫、壤	15	5	5	10	"
30	" 上辰野	2	段丘崖	40°W	35°	砂礫、壤	26	9	5	12	8,1,9
31	" "	4	山 麓	50°W	20°	礫、壤	12	4	10	22	"
32	" "	2	山 麓	60°W	18°	礫、壤	20	6	12	22	"

長野縣伊那谷北部の竹藪に就て

五九

五九

番號	位 置	面積 (a)	地形	傾斜 方向	傾度	土質	密度	初年生長 本數	長さ (m)	太さ (cm)	調査 年月日
33	" "	3	段丘崖	40°W	45°	礫、土	18	5	6	13	"
34	" "	2	段丘崖	5°W	45°	礫、壤	16	5	6	13	"
35	" "	2	扇狀地	90°W	10°	礫、壤	25	6	5	12	"
36	" "	1	段丘崖	40°W	35°	礫、壤	16	4	4	10	"
37	" "	2	段丘崖	40°W	40°	礫、壤	15	6	6	14	"
38	" "	2	山 麓	80°W	25°	礫、壤	12	5	12	22	"
39	" "	2	段丘崖	60°W	42°	礫、壤	23	6	9	17	"
40	" "	6	崖 錐	40°W	25°	礫、壤	24	6	8	17	"
41	" "	2	扇狀地	50°W	20°	礫、壤	20	3	7	11	7,11,20
42	" "	1	扇狀地	70°W	7°	礫、壤	10	3	7	15	"
43	" "	1	段丘崖	20°W	30°	礫、壤	15	4	6	12	"
44	" 下辰野	1	山 麓	80°W	10°	礫、壤	16	5	10	20	"
45	" "	1	山 麓	90°W	5°	壇、壤	12	3	6	12	"
46	" "	3	段丘崖	50°W	35°	砂、壤	20	8	10	15	"
47	" "	6	段丘崖	65°W	45°	砂礫、壤	13	5	8	13	"
48	" "	4	山 麓	40°W	27°	砂、壇	20	6	6	12	"
49	" "	8	段丘下	70°E	30°	砂、壤	12	4	10	18	"
50	" 宮木	9	段丘崖	20°W	35°	壇 土	14	5	7	13	8,3,28
51	朝日村 平出	1	堰端崖	15°W	40°	礫、壇	18	6	7	15	8,1,10
52	" 澤底	1	山 麓	40°E	48°	壇 土	21	10	10	20	"
53	" "	1	山 麓	90°W	12°	壇 土	20	10	4	8	"
54	" "	1	山 麓	90°W	32°	壇 土	14	6	6	12	"
55	" "	1	山 麓	80°W	35°	壇、壤	15	5	5	10	"
56	" "	1	山 麓	40°E	22°	壇、土	30	7	4	11	"
57	" "	3	山 麓	70°W	22°	壇、壤	25	7	7	13	"
58	" "	1	山 麓	55°E	8°	壇、壤	10	2	9	17	"
59	" "	2	山 麓	35°E	35°	壇、壤	30	9	6	13	"
60	" "	1	河岸崖	70°W	50°	壇、壤	15	6	5	12	"
61	" "	3	山 麓	55°W	20°	壇 土	20	8	10	17	"
62	" 赤羽	1	山 麓	35°E	5°	壇 土	16	2	6	9	7,10,17
63	" 萬五郎	1	河岸崖	74°E	46°	砂礫、壤	26	8	6	16	"
64	" 樋口	10	山 麓	30°E	15°	壇、壤	21	7	9	15	"

地 球

第二十二卷

第一號

六

六〇

長野縣伊那谷北部の竹藪に就て

番 號	位 置	面積 (a)	地形	傾斜 方向	傾度	土質	密度	幼年生 本數	長さ (m)	太さ (cm)	調査 年月日
65	〃 萬五郎	1	平 地	—	—	砂礫、壤	30	8	8	16	7,9,9
66	〃 樋口	1	段丘崖	15° W	33°	砂、壤	19	5	7	9	7,10,17
67	〃 〃	1	河岸崖	55° E	24°	砂、壤	20	6	8	11	〃
68	東箕輪村北小河内	5	山麓崖	35° W	12°	砂、壤	16	5	10	20	〃
69	〃 〃	2	山 麓	7° W	20°	砂、壤	14	5	10	18	〃
70	〃 〃	2	澤 口	60° W	45°	砂、壤	14	4	7	11	〃
71	〃 〃	1	段丘崖	10° W	28°	砂、壤	20	8	7	11	〃
72	〃 〃	1	段丘崖	10° E	18°	砂、壤	10	4	7	11	〃
73	〃 〃	4	山 麓	5° E	5°	砂、壤	10	3	12	21	〃
74	伊那富村神戸	1	山 麓	80° E	5°	礫、埴	25	6	4	8	7,12,1
75	〃 〃	3	段丘崖	10° E	35°	砂、壤	14	3	6	14	〃
76	〃 〃	1	河岸崖	70° W	30°	砂礫、壤	18	5	7	13	〃
77	〃 〃	2	窪 頭	60° E	23°	礫、壤	18	6	6	13	〃
78	〃 〃	10	河岸崖	45° W	40°	砂礫、壤	13	2	8	15	〃
79	〃 北大出	4	河岸崖	40° W	35°	砂礫、壤	20	4	6	12	〃
80	〃 羽場	1	河岸崖	90° W	40°	砂礫、壤	9	1	6	6	7,10,30
81	〃 〃	1	窪 地	75° W	35°	埴、壤	25	6	6	8	〃
82	〃 北大出	3	扇狀地	20° E	5°	礫、壤	17	4	10	18	〃
83	〃 〃	8	扇狀地	20° E	10°	礫、壤	28	8	15	20	〃
84	〃 〃	12	山 麓	15° E	15°	埴、壤	13	4	15	18	〃
85	〃 〃	1	山 麓	70° E	10°	埴、壤	10	3	10	17	〃
86	〃 〃	1	山 麓	50° E	40°	埴、壤	8	3	4	10	〃
87	〃 〃	10	山 麓	80° W	10°	礫、壤	18	8	17	23	〃
88	〃 〃	1	山 麓	90° E	5°	礫、壤	18	4	11	15	〃
89	〃 〃	8	山 麓	60° E	23°	礫、壤	12	4	13	20	〃
90	〃 〃	12	扇狀地	30° E	5°	礫、壤	13	4	15	20	〃
91	中箕輪村長田	6	扇狀地	30° W	10°	埴、壤	17	4	6	11	〃
92	〃 〃	5	山 麓	20° E	10°	埴、壤	10	4	10	16	〃

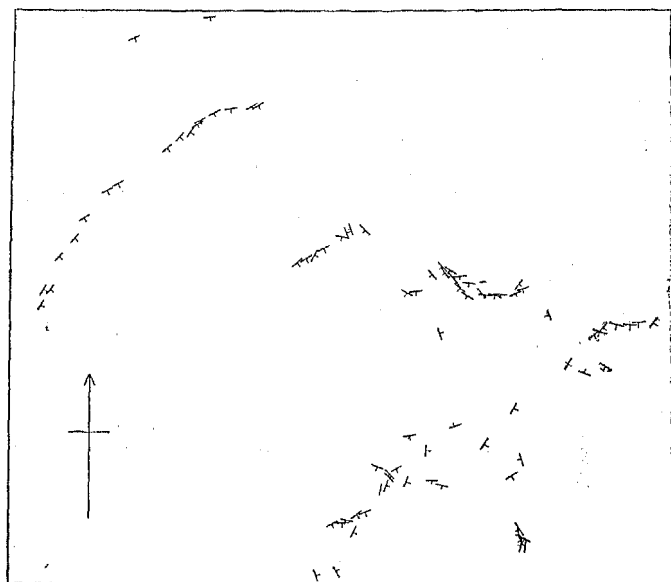
三 分布狀態

第一圖によつて竹藪の分布を見るに、その著るしく地形に制約されてゐることが明らかである。其の一つは東西性の溪谷に添ひ且つ谷の北側に分布することである。即ち飯沼川・横川川・小横川川・澤底川等の各溪谷であつて、特に小横川谷に於てはその立地面積二〇〇アールに及び斷然伊北地方の首位を占めてゐる。然るに南北性の溪谷即ち辰野以北の天龍川谷と小野川谷にあつては殆んど見ることの出来ないことは興味ある分布現象である。更に其の一つは山麓に多く、谷底平坦部には稀に分布することである。即ち大城山塊南麓木曾山塊及び伊那山塊の山麓には良く發達するも天龍川沿岸の平坦地帯には極めて稀である。又竹藪立地の地形

第二表 地形分類表

地 形	箇 數	百分比
山 麓	44	47.8
段丘崖	19	20.7
扇狀地	8	8.7
河岸崖	8	8.7
崖 錐	4	4.3
其の他	9	9.8

を分類して見れば凡そ第二表の如くである。
山麓に立地するものは約半數を占め、次に段
第二圖 傾斜分布圖



丘崖にあるものも相當多いことが知れる。殆んど全部が傾斜地形であつて平坦地には稀であることは注意すべきである。尙立地の地形を見るためにその立地の傾斜分布を作つた。大體の地形とよく一致し傾斜の向も南か南東か南西であり、他の場合は全く異例である。従つて溪谷に分布するものはその排列も整然としてゐる。

第三表 傾斜分類表

傾 斜	箇 數	百分比
0°—10°	17	18,5
11°—20°	13	14,1
21°—30°	22	23,9
31°—40°	28	30,5
41°—50°	12	13,5

第三表によつて立地面の傾斜角度を見れば三〇度乃至四〇度のものが三〇%もあり、是に次いで二〇度乃至三〇度のものが二四%あつて、甚だしく急斜面に立地してゐることが考へられる。土質は古

期水成岩の崩壊土より成る多分に砂礫を混入せる土壤が多く、澤底其の他二三の地點に於ては火山岩の崩壊土より成る埴質土である。而して

土質の大部分は地形と相待つて排水は著るしく良好である。濕地は鞭根の發育悪く且つ水枯病朱病等に罹り易いため特に竹には適しないと云ふ。海拔高度は八〇〇米以下を主とし、九〇〇米附近は北大出の一部、小横川溪谷の奥地、小野盆地の一部飯沼にあり、一〇〇〇米以上は絶無である。

以上を綜合して考察するに伊那谷の最も寒冷的な氣候を有する北部地方にあつては、その分布が著るしく地形に支配されてゐることが再吟味され、まことに當然なことではあるが興味ある現象である。云ふまでも無く地形と氣候とは密接な關係があり、此の地方の微氣候の觀測が必要であるが未だその資料が無かつたので此所に參考とするを得なんだ。最近この地方の教育會の事業として氣象觀測を始めた由であるからその結果は期待される。

前述の如くこの地方の竹藪が特に東西性の谷の北側にあり、且つ相當な急傾斜を以て南方に

傾斜するは、恐らく年中卓越する南北性の風特に冬季の寒風を避け溫暖を保たんが爲であらう。常に強風の當る所は竹の特性として、浅い鞭根は風のため搖ぎ易く、筍の發生や生長に惡影響を及すを以て防風林さへ必要とされるが、此の地方にありては自然の地形が防風の障壁となつてゐる。又日當りが良く排水の良好なることは殊に此の地方として必須條件である。要するに伊北地方に於ける竹藪立地の状態は中林孝郎氏が「竹は東南又は南向の排水良好な緩傾斜地で、而も其の土壤は礫質壤土若しくは砂質壤土を最も好むものである。」と記述せるものとよく一致してゐるのである。

更に聚落の上より見れば竹藪は殆んど屋敷林であつて、或は聚落の背景となり或は其の前景となつてゐる。又竹藪のあるは多くは舊家或は資産家であり、尙寺には必ずずきものとされてゐる。大城山塊の南麓辰野に於ては山麓と段丘崖の二列に竹藪が分布し、その間に聚落が散在

してゐる景觀は中央線の汽車の窓からも眺められる。又冬の靜かな村をして一層平和の趣を感じしむるは、茅屋の民家や白壁の土藏と竹藪のみどりとが程よく調和を見せてゐることである。袋状をなす横川川妹姉谷に多くの竹藪を見るのは興味あることであるが、殊に小横川にあつては舊高遠藩の殿藪として保護されてゐたことは注目すべきである。その頃小横川の竹入靖氏・小澤昇氏の兩家でその藪守りを仰付かつてゐたと云ふ。當時の記録によれば總面積一町九段五畝二十一歩内殿藪分四段七畝二十九歩とある。

註(三)小松三郎 木曾山脈北部東斜面に於ける地形と人文に就て 地球第一四卷第一號

(四)中林孝郎 竹林の合理的栽培法 三九頁 昭和三年 成美堂

(五)(四)に同じ 一〇七頁

(六)八木貞助 上伊那の地形と自然界 一八頁 大正十五年 古今書院

(七)小澤彦九郎氏の報告に據る

四 林相に就いて

林相と云つても植物學的の調査をしたのではないからほんの概觀に就いて述べるに止める。立竹の密度即ち竹藪の鬱閉度は筍の發生やその大小に直接の影響を及すと思はれるが、調査地域の過半数は手入不充分にして自然に放任せるもので所謂藪をなしてゐるため、その統計的結果も餘り好成績は望めなかつた。次表は部落を單位とし第一表より計算したものである。密度一アールに付き三百本乃至五百本位は割合に筍

第四表 部落別統計表

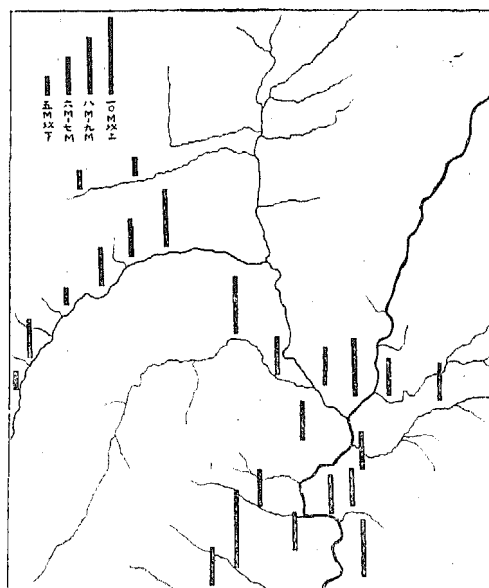
部 落	面積	竹發生率 %	平均 長さ m	平均 太さ cm
山口村	1	40.0	5	8
中源川	1	27.5	5	7
上上	8	30.3	5	10
上前	4	34.1	5	12
門ノ瀬	8	40.0	4	10
	8	35.3	5	12
飯沼澤	9	25.8	6	13
下飯沼澤	8	27.1	7	14
小横川	198	38.5	8	16
宮所	10	46.6	6	12
上辰野	32	29.2	7	15
下辰野	23	35.9	8	15
宮木戸	9	35.7	7	13
神戸	17	24.3	6	12
羽場	2	17.5	6	7
北大出	60	33.7	12	18
平出	1	33.3	7	15
澤底	15	35.4	7	13
赤羽	1	12.5	6	9
樋口	12	29.8	8	12
萬五郎	2	28.7	7	13
北小河内	15	34.3	9	14
長田	11	31.7	8	13

の發生數多く、七百五十本以上はその發生不良となるやうである。筍即ち一年生の竹幹數を同一地域内の總竹幹數で除した値を筍發生率として表中に記入した。

筍發生率は最高五〇%より最低一一%のヶ所まであつたが、平均三〇%以上の部落は一般に良林が多い。是は地域的には何等明らかでないが可成り人爲的の手入如何に依るのではあるまいか。次に同表により竹幹の長さと太さを知るために第三圖と第四圖を作つて見た長さと太さは略比例するもの

も如く、矢張り前項の地理的好條件の位置にあるものはその生長もまた良好であることが兩圖の比較によつて肯かれるのである。又北部の小野

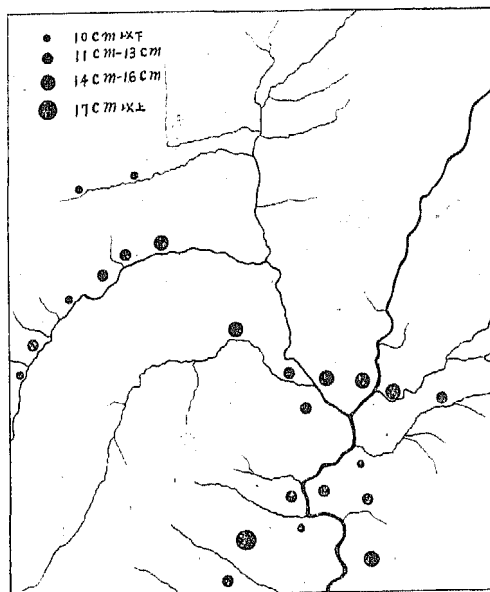
第三圖 竹幹長さ分布圖



盆地や川島溪谷にあつては長さ太さ共に著しく劣つてはゐるが、南部に至るに従ひ太さに比し長さの比較的伸びてゐる傾向は見逸せない一つの現象である。北大出に於ては兩者の生長著しく他をしのいでゐるが、また辰野・小横川・北小河内等にも相當良い林相を見せてゐる。

最後に此の地方の竹藪の特殊相とも云へる景觀は、その竹藪中に必ず落葉老樹の二三本を混へてゐることである。特にその落葉樹の栗・樺の類であることは甚だ以て注意す可きである。多雪地方にあつては冬季雪のために竹幹は被害を蒙るを以て防雪の施設も必要とされる。然

第四圖 竹幹太さ分布圖



るにこの老木の疎枝は雪害を防ぐに充分な役割を果してゐるのである。落葉樹であることは冬季竹藪内に陽光を支障なく投入せしむるために好都合である。

註(八)(四)に同じ 九八頁

五 栽培及び利用狀況

栽植に要する母竹は一年生か二年生の周圍一〇糎位の太さのものがよく、而も雄竹雌竹の一対が必要とされる。雄竹とは竹幹の第一枝が一本のものの雌竹とは二本のものを云ふ。何れも四五段の枝を残しその先は斜に切り去る。植付の時季は八月が良く水植法を以てし支柱を立て、置く。昔から「親にまざるは竹」と言はれてゐるやうに一年毎に大きい筍が発生しやがて立派な竹藪となる。筍は夏土用までに発生せるものは成長させそれ以後発生せるものは取除くが普通である。又早朝竹藪を巡視し筍の葉先に露の生じてゐないものは除去するがよい。これは云ふまでもなく何等かの障害によつて發育不良の

筍であるからである。近年竹材の需要が頓に少くなつた爲、自然栽培上にも意を用ひず放任してあるものの多いことは前述の通りであるが、それでも次の如き竹藪は相當手入もなし従つて美しくしい林相を保つてゐる。

(27)
(32)
(38)
(44)
(48)
(50)
(57)
(68)
(73)
(83)
(87)

肥料としては塵芥が最も普通であり、丁度一家の芥捨場になつてゐる。農家には常に所謂庭芥が頗る多く且つそれは土砂混りであるため竹藪などは唯一の捨場とされる。中林孝郎氏はまた「塵芥は砂礫地に施せば効驗あるも、腐植壤土や排水不良の地に施せば却つて害がある」と述べてゐるが、此の地方の地形・土質から見れば宛も芥捨場に適してゐるわけである。又麥稈や落葉もよく、竹藪の後方が山續きでもあれば秋の落葉を土砂混りに掻き落して來て林中に散布するが最もよい。小横川では最近蠶のこじりを施した所もあつたがその結果は良いやうである。昔は馬の蹄が竹に特効あると言つて馬の

血取場から拾ひ集めて散布した所もあつた。竹の鞭根は地表に近い浅い所に生育し、新鞭根は常に古鞭根の上部に生育伸長するものであるから、土入は竹の栽培上重要な作業である。即ち一面から見れば土入作業は竹藪の更新法である。前記の塵芥や落葉の中には多量に土砂が混入してゐるので一つには土入の役目も果してゐると云へる。小横川では古來より後背の山腹から土砂を掻き落し土入をしてゐた。

竹の伐採期は所謂「木六月の竹八月」(舊曆)で秋の彼岸頃より翌春二月頃迄がよい。竹幹は三年生頃になれば表面に黒斑が生じ、四年目となれば稍黄味を帯び、六七年になれば全表面赤味を帯びて來ると云ふ。桶屋等で使ふには三年乃至五年生のものがよく、六年を越えたものはこはくなつて使ひ難い相である。

竹の利用は昔は相當に廣かつた。導水用の樋としては一般に用ひられ、製糸工場でも始めは非常に多數使用したが、鐵管や鉛管が是に代は

るに及んで殆んど無用となり、又桶屋では元來無くてはならぬものであつたが是亦金たがの流行や、更に桶に對するバケツ等金屬製容器の出來に依つて竹の利用は半減された感がある。然し竹の本來の特性を利用するはあくまで至便であるだけに自家用とする日用品だけでも少くない。次に此の地方で現在利用されてゐる範圍を列舉する。

樋、物干棹、旗棹、蠶棚、桓根、桶のたが、蠶籠、繭籠、芥籠、蛇籠、茶碗籠、箕、箒、壁材、芥搔、ザル、ビク、箸、竹釘、

小横川では竹材の豊富であるだけに、その利用方面や販路に就いても度々研究され、村農會の斡旋もあり、或は講師を招きて竹細工の講習をなし、或は扇子の骨を作つて名古屋方面へ出荷せんとし、或は筍として東京方面へ送らんとしたが餘り良い成績は得ずに終つた。竹材の單價も大正八九年頃は最も高く一圓につき一四疋位であつたが、現在では三二疋位である。

要するに此の地方の竹材の利用は一つは前記の自家用としての家庭手工業品を得、一つは小野・諏訪等の竹藪の乏しい地方に僅かの市場を求むる程度で十分ではあるまいかと思考する。而してまさに荒廢せんとする此の地方幾多

の竹藪をして、よくその地理的事情を明らかにし以て更生の域に達せしめんとするも現下農村の一課題ではなからうか。――一九三四・二・二――

註(九)(四)に同じ 三三頁

(一〇)(四)に同じ 三四頁

備後の名勝下帝釋峽 (二)

吉 野 益 見

一 のづき

猿飛岩。前者の盡くる所に在り、河中岩骨稜稜露出し茲に數個の巨岩點々渡渉に便なるものあり、猿之を飛び川を越ゆるに因り名づく。是又河床の一勝景なり。

黒岩城趾。前者を去る少許右岸の高臺上に在り。平坦面に城寨の跡存し、附近に練武の弓場馬場等あり、尙水涯に水吸場馬洗場及鍬納場等

ありて、多くの史跡を口碑に留むるも、史實の明かならざるを憾む。

蜂の子嶽。前者より少許の左岸屈曲部に直立する尖峰、峭壁直下百餘米、幅亦之に適ふ、壁頭松其他の綠樹繁り、岩面の中央に斜に一の長裂罅横はり、眞柏つげ等之に沿ひ散點し之を彩れるあり。岩脚の水涯に接する所、幾多の彎曲穿孔あり、こゝに蜂の子の深淵を湛へて水鏡を